一般社団法人
日本肩関節学会
Japan Shoulder Society

Newsletter
06
2016.02

理事長あいさつ

一般社団法人 日本肩関節学会理事長　玉井和哉

日本肩関節学会の近況

日本肩関節学会会員の皆様にはますますご活躍のことお喜び申し上げます。年頭に当たり日本肩関節学会の現状をご報告し、皆様とともに学会の将来像を描く機会にしたいと思います。

本学会の１つの重要な行動目標は国際化です。初代理事長として国際化のフラッグを揚げられた井樋栄二先生は、昨年は学術集会会長として、第１会場の演題をすべて英語での口演とし、また各大陸の肩関節外科の歴史から学ぶ特別企画を設けるなど、学術集会の国際化を実現されました。海外からの参加者にも開かれた学術集会にしていくことで、我々自身が世界の一部になることができるわけですから、この方向性が重要であることは言うまでもありません。今後の学術集会を主催される先生方にも、それぞれの学術集会ごとに独自の企画、工夫をされながら、この流れを続けていただきたいと思います。

日本肩関節学会はすでに40周年を祝い、記念事業として日本の肩関節外科の歩みをウェブ上に公開しましたが、これを海外の方に知っていただくことは学会の国際化のために有効な手段です。理事会では40年史の内容を英文化することを決定し、公開に向けて準備を始めました。

繰り返しになりますが、国際化とは我々が世界の一員として認知されることです。そのためには我々の研究を英文の学術論文として発表していくことがきわめて重要です。会員の皆様には、Journal of Shoulder and Elbow Surgery (JSES) を始めとする国際誌に積極的に投稿をお願いしたいと思います。ただJSESは投稿論文数の増加に伴い採択率が下がり、狭き門となっていることも事実です。実は複数の会員から、日本肩関節学会で英文の学会誌を発行してはどうかというご提案をいただいており、日本の肩関節外科にとって何がベストかを理事会・社員総会でよく検討したいと思っています。なお、このことに限らず、いろいろな問題について率直な提言をいただけると大変嬉しいです。学会は会員のためのものであり、会員の前に扉は開いています。

もう一つ重要な行動目標である教育・研修につきましては、昨年、札幌医科大学解剖学教室ならびに整形外科学教室のご尽力によって、本学会初のキャダバーセミナーを開催することができました。大変好評でしたので、本年も札幌医科大学にお願いして開催する予定です。多数のご応募をお待ちしております。

私は理事長に指名されたとき、リバース型人工肩関節を我が国で成功させ定着させることを目標の１つに掲げました。リバース型人工肩関節運用委員会と関係者のご努力によって本手術の適応や限界が次第に正しく認識され、またレジストリーも整いつつあり、少しホッとしております。ご承知のとおりリバースが長らく導入されなかった我が国では、これに代わる手術手技が開発されてきました。この財産を生かし、リバース一辺倒ではない、我が国独自の機能再建術の文化があってもよいと思います。大いに議論して合理的な体系を組み立てるようにしていきましょう。

一方、学会運営につきましては各委員会からの報告をご参照いただきたいと思いますが、新しいワーキンググループが２つ生まれたことをご報告いたします。

１つは『肩関節手術技術認定のあり方ワーキンググループ』です。これは新しい専門医制度のもと、各領域の学会が教育研修の一環として、あるいは医師のアイデンティティを明確にするものとして技術認定をすることになった場合（たとえば日本整形外科学会認定脊椎内視鏡下手術・技術認定医など）、肩関節に関連する技術認定のあり方を検討する場になります。今すぐに認定制度を創る意図ではなく、いつでも発進できる準備を整えておくということです。

他の１つは『肩の運動機能研究会のあり方ワーキンググループ』です。肩の運動機能研究会は昨年までに12年連続で行われ、参加者は年々増えて昨年は640名でした。しかし会員制をとっておらず、運営上のご苦労も少なからずあると聞いております。また発表論文を収載する雑誌もなく、様々なご要望があることを伺っています。運動機能の研究は肩関節外科にとって大変重要なことですので、医師、理学療法士双方から委員を出し、この研究会の望ましい姿を議論する場を作ることにしました。

日本肩関節学会は2014年に法人化されたのち、徐々に形と実質を整えつつある段階です。ここには書きませんでしたが、財務的に決して余裕のある状態ではありません。会員の皆様には引き続きご理解を賜り、学会が健全に発展できるようご協力をお願いしたいと思います。そしていっそう活発な学術活動を通じて、皆様一人ひとりの肩関節外科が花開くことを祈っております。

新代議員あいさつ

松戸整形外科病院　石毛徳之

今回、日本医科大学千葉北総病院の橋口宏先生、麻生総合病院の鈴木一秀先生よりご推薦頂き、新しく日本肩関節学会代議員の任に就きました松戸整形外科病院の石毛徳之です。私は千葉大学を昭和63年に卒業し、そのまま千葉大学整形外科学教室に入局致しました。その後研修病院を経て平成５年に菅谷啓之先生（現在船橋整形外科病院）と共に帰局、同年日本肩関節学会に入会し、肩関節外科の道へ足を踏み入れました。当時は大学に肩関節外科指導医がおりませんでしたので、松戸整形外科病院に勤務されていた森石丈二先生（現在船橋整形外科市川クリニック）に肩関節外科医としての基礎をご教授頂き、またお誘い頂けたことで、平成11年に松戸整形外科病院勤務が叶いました。以後三笠元彦先生、黒田重史先生に師事し、肩関節手術に関してOpen、関節鏡共にご指導いただき今日に至っております。

私はリーダーシップをとって人を引っ張っていく力量は不足しているかもしれませんが、これまでも肩関節鏡手術研究会や東京肩を語る会の事務局として運営に関与したり、肩関節モデルを用いたワークショップを開催したりすることで肩関節外科の普及・発展を意識した活動をしてきたつもりです。より若い世代に知識や経験を習得できる場、意見交換をする場を提供し、肩関節外科のレベルの底上げに携わることが肩関節外科・学会における私の役割と思っております。現在日本肩関節学会においては編集委員の役割を頂いており、投稿論文の質的向上を促す一助となるべく努力をしております。伝統ある日本肩関節学会の一員として、また代議員として、諸先輩方の功績を伝承し、また、発展させられる様、研鑽を重ねていくつもりです。今後ともご指導をよろしくお願いいたします。

KKR北陸病院整形外科　小林尚史

このたび、伝統ある肩関節学会の代議員に就任させていただきました、KKR北陸病院整形外科の小林尚史です。思えば、昭和62年にスポーツ医学をやりたくて金沢大学整形外科に入局し、肩関節鏡と出会い、この肩関節学

会を通じ多くの方々に出会い、たくさんのことを学ばせていただきました。

この二十数年間で、肩関節鏡視下手術、画像診断、リハビリテーションは大きく進化し、近年では人工関節の登場により肩関節疾患の治療は大きく変わりました。日本だけでなく世界の最先端の動きを見つめながら、自らの診療、手術、スポーツ現場への貢献だけを考え現在まで仕事をつづけ、多少なりとも進歩することが出来たのではないかと考えています。しかし、それは肩関節学会やそこで出会った方々から得た財産がなければ、不可能であっただろうと思っています。

近年では、多くの優秀な後輩たちが、独創的で優れた仕事をしてくれる時代になりました。彼らから多くの刺激をもらいながら自分を高めていくと同時に、夢のある次世代の後輩たちがよい仕事が出来るように、また、自分を育ててくれた肩関節学会にすこしでも恩返しをすることが、今の自分に出来ることではないかと考えています。

今回、代議員に就任するにあたり、後押しをしてくださった方々に感謝すると同時に、未来ある後輩たちにエールを送り、新代議員としての挨拶とさせていただきます。今後ともよろしくお願いいたします。

東北労災病院　スポーツ整形外科　田中　稔

このたび日本肩関節学会代議員に選出していただいた東北労災病院スポーツ整形外科の田中稔と申します。

今回の代議員への立候補を後押ししていただいた、東北労災病院院長の佐藤克巳先生、八木山整形外科クリニック院長の熊谷純先生、そして推薦状を書いていただいた磐城共立病院の相澤利武先生、仙台市立病院の佐野博高先生に深謝致します。

私が肩やスポーツ障害に興味を持ったのは、肩痛で受診した野球選手の診療がきっかけです。画像検査では異常が見つからず少し休んで復帰するとまた肩痛が出現するという状態で、何が肩痛の原因なのか全く分かりませんでした。その後肩関節は土台となる肩甲骨が動き、筋・靱帯などの軟部組織の影響が大きいため、単に肩関節だけではなく全身の運動機能の中で肩関節を捉えることが重要ということに気づき、徐々に肩関節の奥深さに惹かれてきたように思います。そして菅谷啓之先生のもとで研修をさせていただき、国内外の学会では当時秋田大学整形外科教授であった井樋栄二先生と皆川洋至先生、山本宣幸先生をはじめとする秋田大学肩グループの先生方に仲間にいれていただき、肩関節に関するいろいろなことを指導していただきました。また筒井廣明先生や原正文先生、浜田純一郎先生にもいろいろな機会にご指導をいただき本当に感謝しております。このような先生方との出会いが今の自分の礎となっています。

私は現在、肩関節・肘関節・膝関節疾患とスポーツ整形外科の領域では、主に野球選手やラグビー選手の診療を重点的に行っております。また、東北楽天ゴールデンイーグルスのプロ野球選手や日本製紙石巻、ＪＲ東日本東北、トヨタ自動車東日本などの社会人野球、仙台育英高校、東北高校、花巻東高校、山形中央高校などの野球選手のメディカルチェックとコンディショニング指導を行ってきました。スポーツ選手の治療には、正常な運動連鎖の獲得のためのリハビリテーションが重要であり、リハビリのスタッフと二人三脚で障害の治療・予防だけでなく、選手のパフォーマンス向上を目指して行っております。

まだまだ経験不足で微力ではございますが、スポーツ選手の診療の経験を生かして代議員として少しでもお役にたてるよう頑張りたいと思います。今後ともご指導、ご鞭撻のほど宜しくお願い申し上げます。

諸岡整形外科病院・諸岡整形外科クリニック　橋本　卓

この度、日本肩関節学会代議員となりました橋本 卓です。日本肩関節学会へは 1989 年に入会し、同年に福岡で開催された第 16 回が本会での最初の発表でした。産業医科大学整形外科から信原病院に派遣され、恩師であります信原克哉先生のもとで研修をさせていただき、肩関節内圧について発表しました。肩に関する初めての

英文論文も JSES に掲載された“肩関節内圧”でした。その後“肩の痛み”について興味が湧き、大学院で“ヒト肩関節包の神経分布と変性”をテーマに病理組織学的研究を行い、フィンランドで開催された第 6 回国際肩関節学会（1995 年）で Best paper award をいただきました。この時に日本から参加された多くの肩関節を専門とする諸先生と知り合うことができたことが賞以上に私にとって最も大きな収穫でありました。この研究論文が CORR に掲載され学位も取得することができました。大学院時代には長崎大学の故伊藤信之先生（第 20 回会長）のところに肩の手術を見させていただくために長崎まで通ったことが思い出されます。その後、鈴木勝己名誉教授のご許可を得て、北米に臨床留学、SLAP 損傷で有名な Dr. Snyder、Dr. Bigliani、Dr. Ianotti、Dr .JP Warner など著名な先生にその当時最先端の関節鏡視下手術、人工肩関節全置換術を見学、cadaver を使った鏡視下トレーニングもしました。帰国後の 1996 年の第 23 回日本肩関節学会において本学会で最も権威のある髙岸直人賞（第 10 回）を幸運にもいただくことができました。1999 年に信原先生にお声を掛けていただき信原病院に再び勤めさせていただくことになりました。先生のご許可のもと肩の臨床と病理組織学的研究を行わせていただき、腱板の組織学的変性に関する英文も書くことができました。また本学会にも毎年発表をさせていただき、会に参加することで多くのことを学ぶことができました。2011 年に故郷の福岡に戻りましたが、肩の臨床を続けたく、本格的に肩関節鏡手術を再開し拙い発表を本学会で続けさせてもらっています。日本肩関節学会は私を育ててくれ、多くの諸先輩に出会える機会を与えてくれました。今後は今までの経験をもとに伝統ある本学会に少しでも恩返しができますように精一杯努力する所存でございますので何卒よろしくお願い申し上げます。

桑野協立病院　整形外科・トレーニング部門　浜田純一郎

この度、代議員に選出された桑野協立病院、整形外科・トレーニング部門の浜田純一郎と申します。日本肩関節学会（以下、肩学会）に所属し 26 年間に多くの先生方にご指導をいただきました。代議員になりたくないと考えていた期間は長く 60 歳を前に今更ですが、恩返しの意味と、国際化の基となる「日本の肩学」の発展に寄与しなくてはという思いで代議員になりました。任期は 6 年しかありませんが（笑）、次の世代への繋ぎ役として働かせていただきます。

この 4 年間韓国肩肘学会 (Korean Shoulder Elbow Society: KSES) に毎年参加し、KSES の国際化戦略を観察してきました。まず KSES の active member の数は 30 名程で（最近若手の成長が著しい）、全員の顔と得意分野をお互いに把握できる。日本肩学会の 1980 年代と同じ環境でしょうか。したがって、(1) 共通の目標を設定し共に行動している。(2) 鏡視下手術の進歩とともに、全員で症例を増やし英語論文をたくさん投稿する体制を築いた。(3) 最後に英語の発表や論文書きにおいて日本人より英語に堪能である、この 3 点に集約されます。

日本も同様な方法で国際化を図れるでしょうか。KSES と同じ方法では無理なように思います。創設から 42 年目を迎える肩学会はすでに成熟し、会員数も多く一人一人の会員の顔と得意分野を把握できる環境にはありません。各研究機関や個人の国際学会での発表・講演、英語雑誌への論文掲載によって日本の肩の国際化は成立しています。今後 20 年を予測すると鏡視下手術で進歩できるのびしろは減少傾向でしょう。最近の英語論文を読むと、ほんの少しですが従来の考え方から次の時代への模索を感じませんか。日本のわれわれと欧米の医師の肩疾患に対する哲学は同じでしょうか。そうではないですよね。日本独自の肩に対する感じ方、アプローチの仕方を追求すれば肩に対する視点が生まれ、この「日本の肩学」から国際化を図れると考えております。今後肩学会の学術委員として、会員の皆さまにさまざまお願いすることもありましょうが、ご協力をいただければ幸いです。

大阪医科大学　整形外科　三幡輝久

このたびは日本肩関節学会代議員に選出していただきまして、ありがとうございます。

私は大阪医科大学の阿部宗昭教授と土居宗算先生のもとで肩の勉強を始め、その後アメリカに留学し、University of California, Irvine の Orthopaedic Biomechanics Laboratory の Thay Q Lee 教授と Kerlan-Jobe Orthopaedic Clinic の Frank Jobe 先生のもとで肩のバイオメカニクスと臨床について勉強させていただきました。今の私があるのも多くの素晴らしい先生にご指導を受けることが出来たからと感謝しております。今後は私が若い先生の力になることが出来ればと考えております。また肩学会の代議員として、国外でも存在感のある仕事を継続していくことで、日本肩関節学会を世界にアピールしていければと考えています。どうぞ宜しくお願い申し上げます。

吉岡病院　整形外科　村　成幸

今回、新しく日本肩関節学会代議員を拝命いたしました山形の村 成幸と申します。平成元年に山形大学を卒業、整形外科に入局しましたが、信原病院で研修した後藤康夫先生が、最初のオーベンでした。それが肩の入り口でした。同年初めて福岡で行われた日本肩関節学会学術集会に参加し、その内容と熱い議論に肩関節に興味を持ちました。数年後まだ山形では関節内鏡視のみであった肩関節鏡を勉強したいと思い、後藤先生から大阪の米田稔先生にお願いして頂きました。阪神大震災直後の大阪厚生年金病院（現大阪病院）で研修させて頂いてから 21 年が過ぎてしまいました。当時の代表的鏡視下 Bankart 修復術であった Caspari 法を必死になって習得しようとしたのがついこの間のことのようです。

この 20 年の肩関節外科の変化を考えてみると、鏡視下 Bankart 修復術は gold standard となり、腱板は鏡視下に一般的に修復されています。リバース型人工肩関節全置換術（r-TSA）が本邦でも手術できるようになりました。しかし、いまだに鏡視下 Bankart 修復術は、その再発率においてオープン法を凌駕したとはいえず、また鏡視下腱板修復においても一定の割合で再断裂はみられます。r-TSA は腱板一時修復不能例に対する素晴らしいオプションではありますが、適応は厳しく、あくまで人工関節です。五十肩の病態、要因、発症メカニズム、腱板断裂における無症候性と有症状性の違い、投球障害肩の診断などまだまだわからないことだらけであります。しかし素晴らしい研究成果を目の当たりにして感動することもしばしばです。

山形では、故荻野利彦先生が、2009 年に学術集会を開催し、その準備、運営をお手伝いさせて頂きました。肩関節を通じて、海外、日本国内の先生方と交流できることは、大変素晴らしく、楽しいことであることを身をもって体験させて頂きました。今後は代議員として山形県を代表し本学会、肩関節外科の発展に貢献できるように努力していく所存です。どうぞ宜しくお願い申し上げます。

東京医科歯科大学　関節機能再建学　望月智之

この度、日本肩関節学会の代議員を拝命しました東京医科歯科大学の望月と申します。御推挙いただきました理事および代議員の先生方に深く御礼申し上げます。

私はラグビーで反復性肩関節脱臼を経験し、中川照彦先生に手術をしていただくことでラグビー歴を全うし肩関節外科医を志しました。肩関節外科医を志してからは、菅谷啓之先生をはじめ多くの先生方のご指導を受けて参りました。そしてこれからは、代議員という仕事を通してお世話になった先生方、学会員の先生方、そしてこれから肩関節外科医を志す先生方に恩返しするが私の使命であると考えています。

肩関節鏡視下手術の普及によって肩関節を専門とする整形外科医が増えていますが、一方で未だ多くの若手医師から肩関節の診断と治療は難しいとの声を耳にします。また急性期の肩関節周囲炎に対して積極的な ROM 訓練が施行され、強い痛みと拘縮を抱えて専門外来に訪れる患者さんはあとをたちません。若手医師の指導は勿論のこと、肩関節を専門にされていない先生方にも正しい治療法と update な情報を伝えていくことも日本肩関節学会

の仕事ではないかと考えております。

私も未だ若輩者ではございますが、日本における肩関節治療と日本肩関節学会の発展のため全力を尽くしてまいります。どうぞよろしくお願いいたします。

京都府立医科大学大学院医学研究科　スポーツ傷害予防医学講座　森原　徹

平成５年に京都府立医科大学を卒業し、大学院に進学しバイオロジーを中心に研究を行ってまいりました。留学を経て関連病院で外傷や肩関節疾患を学び、平成17年から京都府立医科大学へ戻りました。久保俊一教授のもと、黒川正夫先生、堀井基行先生が行われてきた肩関節学を継承し臨床、研究に邁進してまいりました。この度日本肩関節学会の代議員を拝命し、身が引き締まる思いです。

肩関節疾患の病態はいまだ明らかにされていないことが多く、基礎研究、臨床研究が今後も必要だと痛感しています。また作業・理学療法士を中心としたリハビリテーションも極めて重要な分野です。肩関節疾患の治療成績を向上させるためにもリハビリテーションにおける教育、臨床、研究の発展が不可欠と考えます。これまで以上に医師と作業・理学療法士が連携できる体制になれるよう努力したいと思っています。

また個々の研究者や臨床医が行ってきた臨床研究だけではなく、学会全体で行うべきプロジェクトについて、代議員の一人として参画し肩関節学の発展に寄与できればと存じます。これまで学会を牽引されている理事、代議員の先生方とともに、お役に立てるように微力ではございますが、努力を惜しまない所存でございます。今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。

福井総合病院　整形外科　山門浩太郎

代議員を拝命いたしました山門浩太郎です。

このたびは、一方ならぬお引き立てを賜り、まことにありがとうございます。このような大役をおおせつかり、その責任の重大さを改めて痛感している次第であります。 微力では御座いますが、皆様の納得のいく実績をあげるべく、努力していく所存であります。 まだまだ若輩者ですが、ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

現在、学会のあり方ワーキンググループとそこから引き続き肩関節手術手技認定のあり方ワーキンググループの議論に参加させていただいておりますが、諸先輩がたの熱意に驚かされているところです。

肩学会は、大学間の垣根を感じさせない深さがあり、学問としても臨床としても実にやりがいのあるフィールドであると感じております。今後は、若年会員の意見を代弁できるよう努めて参ります。また、私の勤務先は北陸三県でもさらにマイナーな福井県にある民間病院です。おそらく、典型的な田舎の中規模病院であるものと考えます。都会の視点とは異なる見方ができればとも考えております。

最後に、私の大好きな、ロバート・Ａ・ハインライン「夏への扉」の結びをご紹介させて頂き、抱負とさせていただきたく存じます。重ねまして、今後共ご指導宜しくお願い申し上げます。

「そして未来は、いずれにしろ過去にまさる。」

「両手で、器械で、科学と技術で、新しいよりよい世界を築いてゆくのだ。 」

第 42 回日本肩関節学会開催を終えて

第 42 回日本肩関節学会　会長　井樋栄二（東北大学医学系研究科外科病態学講座整形外科学分野）

2015 年 10 月 9 日、10 日の 2 日間、第 42 回日本肩関節学会が仙台国際センターで開催されましたので、ここにご報告致します。演題登録数は 460 題、参加者は 1,517 名（運動機能研究会参加者を含む）とどちらも過去最高を記録し、お陰様で学会を大盛会のうちに終えることができました。会員の先生方をはじめ理学療法士、看護師などご参加いただいた皆様に心から御礼申し上げます。

学会のテーマは「肩の病態解明を目指して」としました。肩関節外科医にとって手術手技の向上は重要なことですが、臨床的もしくは基礎的に病態解明を進めることが同じく重要なことです。口演会場ではこの病態に関係した多くの素晴らしい研究が発表され、議論されました。これを機に、病態解明がさらに進むことを願っています。

今回の学会の特徴は口演会場を 2 つに減らしたことです。そのことで参加者の分散を避け、多くの参加者に厳選された口演を聞いてもらうことができました。もう一つの特徴は、第一会場を完全に英語セッションとしたことです。発表も質疑も全て英語としました。去年の森澤佳三会長がすでに第一会場の多くのセッションを英語化しておられましたが、今年はさらに推し進め、第一会場のすべてのセッションを完全英語化しました。これが日本肩関節学会が国際化に向けた新たな一歩を踏み出す一助になれば学会長として大変嬉しく思います。

海外講師としては、北米大陸を代表してアメリカの Robert Neviaser 先生、南米大陸を代表してブラジルの Sergio Checchia 先生、ヨーロッパ大陸を代表してオーストリアの Herbert Resch 先生、そしてアジア大陸を代表して韓国の Kwang-Jin Rhee 先生をお招きしました。そして特別企画では、大陸間の交流を通してどのように肩関節外科が発展してきたのかを 4 名の先生方にご講演いただき、日本を代表して信原克哉先生に日本と諸外国との交流についてご講演を頂きました。肩関節外科発展の歴史を振り返ることで、今後の方向性を見いだすこと、そしてさらに大陸間の交流を深め国際化を促進することに寄与できたのではないかと考えます。

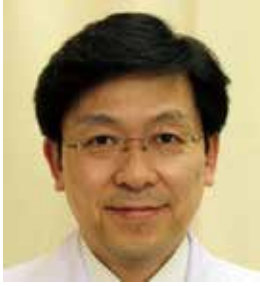
懇親会では若手からの斬新なアイディアを取り入れプロレスを余興として行いました。東北には「みちのくプロレス」という地方プロレス団体がありますのでそこにお願いしました。プロレスショーは予想外に大盛況でリングの周りには黒山の人だかりができました。場外乱闘まで用意されており、老若男女を問わず皆大喜びでした。参加者があまりにもプロレスに熱中してしまったため、せっかく用意した仙台名物の牛タンがかなり残ってしまうことになりました。

東日本大震災から約 5 年が経ちますが、復興はまだ道半ばです。沿岸部への被災地ツアーを通して直に震災の大きさを体験していただきたいと思い、今回学会期間中に被災地ツアーを企画しました。ツアーの参加者からは、被災状況を目の当たりにし、また被災者から直接当時の様子を聞くことができ貴重な機会になったと感謝のお言葉を沢山いただきました。

最後に本学会を開催するにあたり、歴代の学会長、特に前会長の森澤佳三先生には細かい点にまで多くのご助言をいただきました。また玉井和哉理事長をはじめ理事の先生方、代議員の先生方からも運営について多くのご助言をいただきました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

第 43 回日本肩関節学会会長あいさつ

第 43 回日本肩関節学会　会長　望月　由　（県立広島病院　整形外科）



この度、第 43 回日本肩関節学会学術集会の会長を仰せつかり、2016 年（平成 28 年）10 月 21 日（金）、22 日（土）の二日間、リーガロイヤルホテル広島にて開催する運びとなりました。世界で最も歴史のある日本肩関節学会を 35 年ぶりに広島の地で開催させていただくことを大変光栄に存じます。

第 43 回日本肩関節学会学術集会を開催させていただくにあたり、皆様の記憶に残るような充実した学術集会にしたいと、現在、鋭意準備を進めております。本学術集会の開催に関しましては多くの方々にご支援を賜っております。あらためて心より感謝申し上げます。

本学会のテーマは、「覧故考進 -Regeneration-」とさせていただきました。「覧故考進」とは、古い事柄を顧みて、新しい問題を考察するという意味です。これは医学の世界のみならず、医療全般に通じる言葉だと思います。さらに、iPS 細胞の発見に代表されるように組織再生は今後の医学および医療の永遠の命題であると考えております。日本肩関節学会としても今後取り組むべき課題と考え、「Regeneration」というテーマを掲げさせていただきました。

また同時に、第 13 回肩の運動機能研究会を同一会場内で、マツダ病院の菊川和彦先生を会長として開催させていただきます。

日本肩関節学会と肩の運動機能研究会の両会のコラボレーションにより、良好なチーム医療が肩関節外科の今後の治療成績の向上に役立つことは間違いないと確信しております。

10 月の学術集会期間中の広島は、気候も良好であり多くの皆様方にご参加いただいた上で、勉学にも観光にも励んでいただきたいと考えております。学術集会で熱い討論をしていただき、活発な学術集会としていただいた後は、美味な山の幸や海の幸をご賞味いただき、ご参加いただいた皆様方にとって実り多き学術集会にしていただくことを切望いたします。皆さんのご来広を心からお待ち致しております。

委員会報告

※各委員会の構成は学会 HP をご覧ください。

編集委員会からの報告

委員長　濱田一壽

今回の雑誌『肩関節』編集委員会は、担当理事：中川照彦先生、委員長：濱田一壽、副委員長：岩堀裕介先生、内山善康先生を含め 27 名 (昨年と同人数) の委員で構成されています。掲載論文の質をよりよくするため、２月から３月の web 会議を含め例年 4-5 回の委員会を開いております。今年の雑誌『肩関節』の査読は、１回目は編集委員（最大８編）、編集委員以外の代議員・役員（各々６編）、と 48 名 (昨年は 42 名) の査読委員 (各々４編) の３人１組で行い、終了したところです。以降の査読は編集委員が行い、大きな問題のある論文は最終的に編集委員会で審議します。

- 報告事項 -

第 38 巻からオンラインジャーナルになり、雑誌および別冊の発行は中止しています。オンラインジャー

ナルには学会での発表論文、原著、総説、Letter to the Editor、査読者名簿などを掲載しております。掲載された論文に関するご質問がありましたら、事務局までご連絡ください。掲載すべきと判断したものについてはLetter to the Editorに掲載いたします。

今回から、学会での発表の記録であるproceedingも３回の査読を行います。これはproceedingも引用文献として認められているためであり、雑誌『肩関節』の掲載レベルに達しない場合には掲載をお断りすることをご了承ください。他雑誌への投稿済あるいは投稿中・予定など二重投稿の恐れがあるものはproceedingでの投稿はやむをえませんが、論文として掲載可能なものは論文形式での投稿をお願いいたします。本雑誌への投稿論文に雑誌『肩関節』のproceedingの引用は許可されていますが(抄録は引用できません)、編集委員会としては、引用文献はproceedingではなく論文を推奨いたします。

雑誌『肩関節』39巻には合計155編（投稿受付時は162編）が掲載されました。内訳は学術論文97編、原著・総説12編、症例報告21編、proceeding25編です。

第42回日本肩関節学会(2015年)の発表演題435編のうち雑誌『肩関節』第40巻に投稿された演題は合計196編で、内訳は学術論文130編、原著・総説26編、症例報告20編、proceeding20編です。昨年減少した投稿数は一昨年のレベルに回復しております。

３）Web投稿・Web査読システムと投稿規定

投稿は日本肩関節学会のホームページからEM(Editorial Manager)へ貼ったリンクを通して行いますが、ご質問､疑問点は事務局に連絡してください。投稿規定はまだ不備があるため頻回に改訂されています。ホームページ上で随時更新される最新のバージョンをご使用ください。

著者名の記載は、第40巻から施設ごとではなく、主著者、第２著者、第３著者､･･･の順に掲載されます。

字数制限を大幅に超える論文が散見されます。字数制限内でご自分の主張をまとめる良い機会なので、厳守願います。

施設の倫理委員会を通すべき研究として、正常例の研究、保険適応が認められていない薬剤などを使用した研究とします。

臨床研究の経過観察期間は原則として１年以上です。新しい手術法、高齢者の骨折など、やむを得ない理由で１年以上の経過観察をしていない論文については、従来通り編集委員会で掲載の可否を審議することになります。

ご質問がありましたら、カバーレターに記載いただくか事務局にご連絡ください。ご連絡いただいた内容を編集委員会で検討して回答いたします。

４）その他

雑誌『肩関節』に掲載した論文の英文ジャーナルへの投稿の可否については、現在のところ、JSES(Journal of Shoulder and Elbow Surgery)にはすでに投稿可能との返事をもらっており、CORR(Clinical Orthopaedics and Related Research)は編集委員長が掲載に値すると判断した場合に査読が開始されます。詳細は、事務局にお尋ねください。

皆様のご理解ご協力をよろしくお願いいたします。

QOL評価表検討委員会からの報告

委員長　衛藤正雄

QOL評価表検討委員会は現在までに「腱板断裂」および「肩関節周囲炎」に対するShoulder 36の反応性と信頼性の調査を行いました。「腱板断裂」は第41回日本肩関節学会で発表を行い、結果は反応性において有意な中等度以上の相関を認め、医師による重症度判断はすべてのドメインに対し高度な水準で有意な影響を与え

ていることがわかりました。信頼性においても、ほぼ満足すべき結果が得られ Shoulder 36 は腱板断裂患者の患者立脚肩関節評価法として、満足できる反応性と信頼性を有することを確認しています。「肩関節周囲炎」は第 42 回日本肩関節学会で発表を行い、Shoulder 36 は高い再現性を示したので、肩関節周囲炎に対して有用な評価法であると報告しております。

現在は「外傷性肩関節不安定症」に対する Shoulder 36 の再現性を解析中で、第 43 回日本肩関節学会でその結果を発表する予定にしています。

今後の QOL 評価表の広報活動としては第 43 回日本肩関節学会で QOL 評価表（Shoulder 36）のシンポジウム（セッション）を設けていただくようにしており、シンポジウムを通して、種々の肩関節疾患に対する Shoulder 36 の利用を普及させるための啓発活動を行って行く予定です。

国際委員会からの報告

委員長　菅谷啓之

国際委員会は、菅本一臣先生を担当理事とし、委員長菅谷啓之、委員として池上博泰先生、佐野博高先生、船越忠直先生、三幡輝久先生、望月智之先生、オブザーバーとして髙岸憲二先生、井樋栄二先生、次期会長望月由先生を加えた総勢 10 名がメンバーとなります。過去 1 年の活動としては、2015 年春には KSES(Korean Shoulder and Elbow Society) トラベリングフェローとして福井総合病院の山門浩太郎先生、船橋整形外科肩関節肘関節センターの高橋憲正先生を韓国に派遣しました。また、2015 年 9 月末から第 42 回日本肩関節学会までの 2 週間 SECEC(European Society for Surgery of the Shoulder and the Elbow) トラベリングフェロー 2 名の受け入れを行いました。担当施設の先生方には大変お世話になりました。2016 年の活動としては、10 月 6 日から 9 日まで Boston で行われる ASES(American Shoulder and Elbow Surgeons) closed meeting に併せて派遣する 2 名の ASES トラベリングフェロー、および同じく秋にヨーロッパに派遣する 1 名の SECEC トラベリングフェロー（他 1 名は KSES より）の募集を開始しており、5 月の日本整形外科学会時に選考が行われます。さらに、2016 年 5 月には 2017 年春に派遣する KSES トラベリングフェロー 2 名の募集を開始し、10 月の日本肩関節学会時に選考を行いますので、皆様奮ってご応募下さい。一方、ASES、SECEC、KSES とは別に個別の留学斡旋として、フランス、レンヌの Dr. Philippe Collin 他の先生方の下へ、東京女子医大の安井謙二先生を 2014 年 10 月より 2015 年 6 月まで派遣いたしました。これらのフェロー募集は不定期に行っており、その都度会員全員にメールを配信しておりますので希望者は積極的にご応募下さい。国際委員会では、このような個人的な長期海外留学の門戸を常に開いておりますので、海外留学に興味のある学会員は遠慮なく国際委員会メンバーにお声掛けください。今後とも国際委員会メンバー一同、日本肩関節学会員の国際化に向けて鋭意努力していきますので皆様宜しくお願い申し上げます。

社会保険等委員会からの報告

委員長　橋口　宏

会員の先生方にご協力を戴いた 2014 年手術アンケートの集計作業と解析が終わり、望月智之委員、中川照彦副担当理事、米田稔担当理事のご尽力により、結果および報告書を学会ホームページ上に公開することができました。また、雑誌「肩関節」にも掲載予定です。日本における肩関節手術の現状を把握する上で非常に有用な資料となります。会員の先生方にもご活用を戴ければと思います。

肩関節外科における複数手術の保険収載に向けた活動として、「関節鏡下肩関節唇形成手術（腱板断裂手術を伴う）」「人工骨頭挿入術（肩関節）（腱移行術を伴う）」「人工関節置換術（肩関節）（腱移行術を伴う）」に対する厚労省ヒアリングを受け、実態調査に基づいた必要性について説明・要望を行いました。2016 年の診療報酬改正で新設されるかは、まだ決まっておりませんが、未収載となった場合も引き続き要望を行っていく予定です。

外保連（外科系学会社会保険委員会連合）から日本整形外科学会を通じ「肩甲関節周囲沈着石灰摘出術」（K060-2）が外保連試案に収載されていないため、新規登録の依頼を受けました。2014 年手術アンケートでは、石灰化腱炎に対する手術の多くが鏡視下で行われている現状（オープン９例、鏡視下 195 例）を受け、試案収載は鏡視下手術として登録し、保険点数が 3600 点であることから是正の要望も併せて行うことになりました。

肩関節診療における地域格差や十分な保険算定がなされていない検査・処置の実態調査から保険収載を要望していく活動として、超音波検査の保険請求・算定状況について全都道府県におけるアンケート調査を行いました。現在、杉本勝正委員を中心に結果解析を行っております。また、上腕骨近位部骨折の外固定に対する保険算定の実態調査アンケートをまず理事・代議員の学会役員に対して行いました。高瀬勝己委員が中心となり結果解析を行っております。全国的な実態調査を要するため、役員不在の都道府県の会員先生方にも個別でお願いすることがありますので宜しくお願いします。さらに、保険請求項目がない超音波ガイド下石灰穿刺・吸引術に関して、費用・時間などについて調査を行い、外保連試案収載・保険収載要望を行うか検討することも決まりました。

次回行われる 2018 年手術アンケートに関しては、リバース型人工肩関節に関する項目や複合手術調査の追加、内容の簡略化、方法の簡便化など多くの先生方のご協力を得られるよう準備を進めております。

教育研修委員会からの報告

委員長　船越忠直

教育研修委員会は、末永直樹担当理事、青木光広委員、大泉尚美委員、廣瀬聰明委員と船越忠直（委員長）、井樋栄二講師、柴田陽三講師、井手淳二講師、望月由講師で構成されています。

昨年より形式を変更し、教育研修会（review）３年で 12 回を一つのシリーズとし、さらに日本肩関節学会キャダバーワークショップ、肩関節疾患手術手技フォーラムの研修会を行いました。今後も会員の皆様のご意見をお伺いし、よりよい方向へ進むべく検討させて頂きます。

Ⅰ. 第７回教育研修会報告

これまでは、学会期間終了後に行われていた研修会が、第 42 回日本肩関節学会学術集会期間中に行われました。会場には多くの先生に参加して頂き有意義な研修会となりました。

【第７回教育研修会プログラム】

1. 肩の解剖、診察 -review-（青木光広先生）
2. 肩関節外傷性不安定症 -review-（望月由先生）
3. 腱板断裂の病態と治療 -review-（井手淳二先生）
4. 人工肩関節置換術の基礎と実際 -review-（柴田陽三先生）

Ⅱ. 第１回日本肩関節学会キャダバーワークショップおよび第１回肩関節疾患手術手技フォーラム報告

様々な先生のご尽力により、以前よりご連絡しておりました第１回日本肩関節学会キャダバーワークショッ

プが直視下腱板修復（腱移行含む）グループと直視下関節制動術（烏口突起移行術含む）グループに分かれて下記日程で行われました。定員を大幅に上回る参加希望が寄せられ、公平に申し込み順に参加の先生方が選ばれました。キャダバーワークショップに対するアンケートでは大変有益であった 12; 有益であった８と、全ての参加の先生に有益であったとの回答を頂きました。参加費用や実習時間に不満があったものの、プログラム内容は概ねよかったとの評価でした。

キャダバーワークショップ終了後に実際の手術動画を中心にした第１回肩関節疾患手術手技フォーラムが開催されました。特にキャダバーワークショップでの講義が実際の手術でどのように実践されているかがわかるように同一講師により開催され、好評を頂きました。

日時　平成 27 年９月 26 日（土）、札幌医科大学
講師　柴田陽三先生、末永直樹先生、青木光広先生、大泉尚美先生、廣瀬聰明先生、船越忠直先生
対象　日本肩関節学会員　20 名　会費８万円

Ⅲ. 第８回教育研修会ご案内
昨年と同様に第 43 回日本肩関節学会学術集会時に下記内容の研修会が行われる予定です。
画像診断（X 線、超音波、CT、MRI など） review
肩関節周囲骨折（上腕骨近位端骨折、肩甲帯周囲）の診断と治療　review
小児の肩関節疾患　review
肩関節周囲の神経障害 review

Ⅳ. 第２回日本肩関節学会キャダバーワークショップおよび肩関節疾患手術手技フォーラムのご案内
第２回キャダバーワークショップ、手術手技フォーラムが下記日程で行われる予定です。第２回は土日に開催される予定です。
予定日時、場所　平成 28 年 10 月中、札幌医科大学解剖実習室
詳細が決まりましたら、日本肩関節学会ホームページにて御連絡させて頂きます。

学術委員会からの報告

委員長　森澤　豊

学術委員会は、引き続き柏木健児、後藤昌史、佐野博高、高瀬克己、浜田純一郎、林田賢治、森原徹（敬称略）の担当委員の先生方で運営しています。担当理事は畑幸彦先生、委員長は森澤豊です。

昨年度は、2014 年４月から日本でも使用可能となったリバース型人工肩関節全置換術の初期合併症調査を行い、仙台で開催された日本肩関節学会で報告しました。登録開始後 2014 年４月から７月までの 65 肩のうち、肩峰骨折、肩甲棘骨折、不安定性、感染各１例で合併症発生率は 6.2%でした。手術アンケートに協力して下さった施設の先生方に厚く御礼申し上げます。この手術手技が普及するとともに、今後も適応を厳守し安全な手術を心掛けて下さるよう、当委員会からもお願い致します。

今年度は凍結肩の定義について、国内外の過去の論文を渉猟し精査した後、正会員の先生方を対象にメールを通じてアンケート調査を行っております。学会として凍結肩に対し共通した認識を確立するよう検討しています。今後ともご協力をお願い申し上げます。

財務委員会からの報告

委員長　岩堀裕介

2014 年度の本学会の一般会計収支は、約 370 万円の赤字決済となりました。しかしこれは、学会の法人化や事務局の外部委託への移行など、特殊な状況下で学会の法人設立費用や事務局移管費用などが生じた影響によるもので、2015 年度以降の定常的な収支では、今回のような赤字決済にはならない見込みです。財務的にプラスな要素として、雑誌「肩関節」編集委員会の尽力により Web ジャーナル化が軌道に乗ったこと、理事会・各委員会で利用する Web 会議の契約業者を年間契約料で 120 万円程度安い業者に変更したことなどがあり、支出の削減は着実に進んでいます。現在、当委員会では財務状況の安定化に向けた収入の増加につながる活動として、賛助会員や寄附の勧誘活動を進めています。既存の賛助会員の５社の企業様については引き続き継続をお願いし、これまで広告掲載でご協力いただいていた企業様には賛助会員への入会の勧誘を行っています。そして新規の賛助会員の増員のため、製薬メーカー・医療器機メーカー・リハビリ関連器機メーカー様に対して勧誘活動を展開しています。更に、各地域の医療器械ディーラー・義肢装具メーカー様にも勧誘活動の対象を拡大しています。学会ホームページへのバナー広告の掲載について広報委員会と相談して検討していきたいと思います。

ここで、会員の皆様に財務委員会からお願いがあります。正会員の増員は当学会の活性化と収入の増加につながりますので、会員の皆様におかれましては肩関節にご興味がある特に若い先生方の学会入会を勧めていただけると幸いです。また、学会運営費用の基盤は年会費ですので、正会員の皆様には、年会費の納入を年度末である６月末までに極力していただきますことをお願い致します。

この年会費の支払い期限と JSES 購読権が与えられる期間について、改めてご案内致します。年会費や新規入会費は６月末までに納付していただくことを原則とし、６月末までに納付していただいた会員様および新規入会会員様にのみ、その年の８月から翌年の７月までの購読権が与えられます。７月以降 12 月末までに年会費を納付または新規入会された会員様には翌年２月から７月までの購読権しか与えられません。納付が翌年の１月以降になった場合には、購読権は翌年の８月以降になります。

年会費は 2014 年に１万円から JSES 年間購読料（50 米ドル）込みで１万 5000 円に値上げさせていただきました。しかし、１ドル 120 円ベースで算出しますと購読料に６千円が回ることとなり実質の年会費は９千円に目減りすることとなります。今後、為替状況の円安傾向が進みますと実質年会費は更に減少することとなります。そこで、更なる支出の抑制と収入の増加に向けた努力を続けていく必要があります。会員の皆様にも、そのような状況をご理解いただき、健全な学会運営のためのご協力をお願い致します。

倫理・利益相反委員会からの報告

委員長　橋口　宏

本委員会では、雑誌「肩関節」編集委員会より依頼された倫理審査を要する学術研究の掲載可否の審査を行うことに加えて、利益相反（conflict of interest: COI）マネージメントも行うことから、名称を「倫理・利益相反委員会」に変更することになりました。

理事・代議員の所属施設における倫理委員会の設置状況についてアンケート調査を行い、この調査結果を基に医学研究の審査・承認を行う倫理委員会を本学会で設置するかに関して検討が行われました。５名の代議員から設置要望がありましたが、厚労省の「医学的研究に関する倫理指針」に準ずる倫理委員会の設置は人員確保・費用の面から困難であると判断し、本委員会では医学研究の倫理審査・承認を行わないことになりました。一方、「保険適用外治療の研究」「prospective 研究」「正常例が対象に含まれる研究」は所属施

設の倫理委員会審査・承認が必要であるため、学術集会での抄録登録時に倫理委員会承認を受けているか、承認番号や保険適用外の薬剤使用・器械が含まれているか、などの項目をチェックボックスで追加し、倫理審査の必要性の注意喚起を行うよう学術集会会長に依頼することが決まりました。

本学会における COI に関する指針および COI 申告書（案）を審議・修正を重ねて策定しました。理事会承認後に学会ホームページに収載されることになりました。学会発表時の COI 開示は本規定に準じて行われ、また学会役員や事務局等の COI 自己申告も規定に従い順次行われていくことになります。

また、本学会員の会員資格停止・除名・入会禁止などの処分に関しては、総会や理事会から依頼を受けた場合に本委員会で審議することが決まりました。

学会員の先生方への医学研究における倫理審査や COI マネージメントの重要性を啓発する活動を今後も積極的に行っていく予定です。

定款等運用委員会からの報告

委員長　中川泰彰

当委員会は、2014 年８月に法人化された後に問題が生じてきた定款や委員会規則などについて、審議するために設けられた委員会です。今年の 10 月に第４回運用委員会が開催され、報告事項として、以下の項目がありました。

第３回委員会で決定した以下の規則の確認

通信会員規則及び会費徴収方法：原案通り承認され、理事会、社員総会で審議されることになりました（平成 27 年 10 月８日の社員総会で承認された）。

委員会規則：原案通り承認されたが、平成 27 年 10 月８日の社員総会で「3 期６年」が連続なのか、通算なのかで、社員総会の中で意見が分かれ、結局連続３期６年であることが社員総会で確認され、再度次回の当委員会で文面について議論することになりました。

代議員選出規則：原案通り承認され、理事会、社員総会で審議されることになりました（平成 27 年 10 月８日の社員総会で承認された）。

審議事項として、以下の項目が審議されました。

１）通信会員規則、委員会規則、代議員選出規則の変更に関わる定款の変更について：第６条　入会　の第６項の２行目の「第１項の理事会決議」を「第２項の理事会決議」に変更した案が承認され、理事会、社員総会で審議されることになりました（平成 27 年 10 月８日の社員総会で承認された）。

通信会員規則に関する入会申込書の書式：事務局から提案された書式が承認された。広報委員会の許可が得られたら、ホームページに掲載することとなりました。

３）学会賞に関する規則の審議：第３条や審査方法第３項の「期限内」がいつを指すのかが確かでない点、受賞時に論文が公表されていなくてもよいのか（英文論文投稿の時は十分ありうることと思われる）及び審査方法第５項の「上記の条件」が何を指すのかがよくわからない点などがあり、高岸直人賞決定委員会へ一旦差し戻すことになりました。

現時点で、議論しつくされていない内容として社員総会の位置づけ、補欠についての具体的な内容、学会賞規則の文面変更などがあります。名誉会員、理事、代議員、会員の皆様方、定款や委員会規則で理解しがたい点や、内容の不備な点などにお気づきになられた時は、当委員会までご一報ください。検討させていただきます。

また、法人化後１年強が経過し、いろいろな規則の問題点が整理できつつあるため、この委員会はあと１年で休会する方向となりました。ただし、社員総会終了後、定款の変更には代議員の 2/3 の賛成が必要だが、

その選挙方法について、どこかに記載すべきではとの提案が名誉会員からなされたので、次回の当委員会でこの件も審議することになりました。

今後とも皆様方のご支援、ご鞭撻をよろしくお願い申し上げます。

リバース型人工肩関節運用委員会からの報告

委員長　髙岸憲二

本邦で使用開始から２年が経過しようとしているリバース型人工肩関節全置換術（RSA）は、昨年末までで 1600 件を越す手術が行われていますが、今までに大きな合併症が頻発しているとの報告はされていません。RSA は使用開始後５ 年間は全例登録が義務ですので、各メーカーからリバース型人工肩関節運用委員会委員へ各病院における毎月のリバース型人工肩関節全置換術の使用実績が報告されています。また、日本人工関節登録制度事務局（JAR [Japan Arthroplasty Register]）からは、各病院における手術件数の情報をいただいています。両者を比較するとどの病院の誰が登録していないかが一目でわかります。たとえば、2015 年７月時点で JAR のリバース型 TSA 登録現状について、３社合わせて 1,238 例のリバース型 TSA が施行されていましたが、日本人工関節学会登録制度委員会に登録されていたのは 685 例であり、登録率は 55% でした。また、82 施設から１例も登録されていませんでした。これらの施設に勤務している医師には登録をお願いしております。勤務している病院以外で RSA の手術をした場合にどの病院で登録するかの疑問に対しては、JAR 事務局より症例は手術をした病院で登録するように指導がありましたので、RSA 手術を行われた病院を登録するようにお願いします。また、他院で行った手術を自分が勤務している病院の症例として登録した医師の存在も判明しましたので、手術を施行した病院を至急登録し、変更を届けるように警告しました。また、本学会から使用上の注意として

【しなければいけないこと】
・ガイドラインの適応を順守すること
・慎重に Informed consent を得ること
　以下の３点を必ず加えること
　　1) 長期には三角筋疲労により挙上機能が低下してくる
　　2) 長期の予後は分かっていない
　　3) ガイドラインにもあるように最終手術である
・全例登録（施設登録＋症例の登録）をすること

【してはいけないこと】
・術者としての資格がなく手術をしてはいけない
・他に治療法のない再手術例や腫瘍例を除き、原則 70 歳未満の症例に手術をしてはいけない
　（特に外傷例や初回手術例）
・自動挙上できない偽性麻痺肩をすぐに手術してはいけない
　（数ヶ月で挙上可能となる例が多数ある）
・腱板が機能している症例に手術をしてはいけない
・腱板機能の再建ができる症例は再手術例であっても手術をしてはいけない
・関節窩の骨が大きく欠損している症例に手術をしてはいけない
　（再建できる例を除く）

・施設登録および症例登録をせずに学会や論文での発表をしてはいけない
・施設登録をしていない施設で手術をしてはいけない
を講習会受講者宛にメールでお知らせしました。

以上、本委員会の活動を報告しましたが、皆様にはリバース型人工肩関節が安全に行われるように講習会受講規定の遵守、5 年間の全例登録ならびにガイドラインの遵守にご協力をお願いいたします。

40 年史編纂委員会からの報告

担当理事　井手淳二

40 年史編纂委員会では、日本肩関節学会 40 年の節目に過去をしっかり記録することを目的として、日本肩関節学会 40 年史を完成させ、昨年 10 月に日本肩関節学会ホームページに掲載しました（日本肩関節学会 40 年史サイト http://www.j-shoulder-s.jp/40th）。

その内容は、

1）理事長挨拶（玉井和哉先生）
2）日本肩関節学会の黎明　肩関節研究会の創設（信原克哉先生）
3）組織体としての日本肩関節学会の変遷（柴田陽三先生）
4）JSS の国際交流（小川清久先生）
5）アジア肩関節学会の発足と発展（筒井廣明先生）
6）歴代会長の紹介
7）名誉会員一覧
8）物故名誉会員の紹介
9）歴代委員会

以上で構成されています。

御寄稿いただきました先生方には厚く御礼を申し上げます。

これで委員会活動は終了いたします。現在、理事会で日本肩関節学会を世界にアピールすべく、この 40 年史サイトの英文化を検討しています。また、日本肩関節学会 40 年史の追加やご意見などがありましたら、事務局に連絡いただければ幸いです。

選挙管理委員会からの報告

委員長　伊﨑輝昌

1 委員交代

就任：　委員　橋本瑛子
　　委員　橋本　卓
退任：　委員　森原　徹

2 選挙結果

2015 年 10 月 8 日、社員総会において、代議員選挙と第 45 回学術集会会長選挙を行いました。下記の通り、決しましたので報告します。なお、詳細（得票数等）は、会員専用ページにて公開しております。

記

代議員選挙　選任（定員 10 名）

石毛徳之、 小林尚史、 田中　稔、 橋本　卓、 浜田純一郎
三幡輝久、 村　成幸、 望月智之、 森原　徹、 山門浩太郎
（50 音順）

第 45 回日本肩関節学会学術集会会長選挙　選任
菅本一臣（大阪大学大学院医学系研究科運動器バイオマテリアル学　教授）

以上

手術手技認定のあり方ワーキンググループからの報告

委員長　山崎哲也

手術手技認定のあり方ワーキンググループは、井樋栄二先生を担当理事とし、委員長を山崎哲也、委員として大泉尚美先生、松浦恒明先生、山門浩太郎先生、山本宣幸先生に加え、アドバイザーに米田稔先生、オブザーバーとして菅谷啓之先生、玉井和哉先生を加えた総勢９名がメンバーとなります。玉井和哉理事長の当ワーキンググループ新設の趣旨を紹介すると、「専門医については現在、個々の学会ではなく日本専門医機構が認定することになり、整形外科領域では基本領域として『整形外科専門医』、サブスペシャルティとして『手外科専門医』、『脊髄脊椎外科専門医』が認定されています。一方各領域の学会は、『専門医』を認定することはできませんが、教育研修あるいは医師のアイデンティティを明確にするものとして、技術認定をすることは可能であり、日本整形外科学会認定脊椎内視鏡下手術・技術認定医はその一つです。また日本関節鏡・膝・スポーツ整形外科学会（JOSKAS）では、手術 Web 登録システムを開始し、学会専門医制度との連動を図るべく専門医制度検討委員会を設けています（JOSKAS ニュースレターより）。現在肩の領域では、もちろん専門医はありませんし、手術手技が一定のレベルに達してもそれを担保する技術認定制度もありません。その為、本ワーキンググループで、肩の領域での技術認定制度を作るべきか、作るとすればどのようなものがよいのかを議論すること」です。

上記ワーキンググループ新設の趣旨に基づき、第１回の Web 会議を 2016 年 12 月８日に開催しました。委員の先生方、アドバイザーおよびオブザーバーの先生方９名全員の参加の下、玉井理事長より本ワーキンググループ発足の経緯、趣旨のご説明後、他学会の動向や、日本肩関節学会としての今後のありかたなども含めて討議が行われました。会議での議論の内容をまとめると、1. 肩関節学会として手術の技術認定制度をつくるべきなのかどうか？ 2. 技術認定の目的は何なのか？ 3. 認定制度をつくるとすると手術技術としては何が妥当か（鏡視下手術、人工関節など）？ 4. 手術手技認定は何を判断にして行うか（症例数、手術成績、手術ビデオなど）？ 5. 肩関節学会員が認定医になった際のメリットは何なのか？などでした。上記に対して出席者による活発な意見の交換がなされましたが、第１回目としては、結論や決定などを出さず、今後も他の学会の動向に注目しながら、継続して当ワーキンググループで手術手技認定に関して検討していくこととなりました。

事務局からのお知らせ

2015 年２月に事務局が (株) アイ・エス・エスに移管してから早いもので１年が経ちました。

12 月には 2015 年度年会費（会期：2015 年８月１日～ 2016 年７月 31 日）の請求書をお送りさせていただき、12 月中旬から１月中旬まではお振込みいただいた年会費の処理に忙殺されておりました。多くの先生方からの早い時期での年会費のお支払をいただきましてありがとうございます。

こちらに並行して、事務局では次のことを進めてまいりました。

【会員専用ページ】

年会費のお振込み状況は、「納付済」「未納入」のみの記載でしたが、2015 年度年会費よりお振込みいただいた日を記載するようにいたしました。

12 月 18 日前にお振込みをいただいた場合は、システム導入前ですので反映はされておりませんが、順次反映していきます。

また JSES のオンライン購読について、付与されている Account Number を「JSES アカウント」として表示させていただいております。こちらは 2015 年度年会費を 1 月末までにお支払いただいた先生方に付与されております。

エルゼビア社から送られているメール『ACTIVATE YOUR ONLINE ACCESS』に購読方法が記載されております。こちらのメールが届いておりませんでしたら、事務局までご連絡ください。購読方法をまとめた資料をお送りいたします。

現在、会員専用ページに一度でもお入りになられた先生は全体の約 40%になります。

まだアクセスをしていない先生がいらっしゃいましたら、会員専用ページには理事会の議事録、社員総会の議事録、また先生方の情報を掲載しておりますので、一度お入りいただきますようお願い申し上げます。

また事務局よりメール配信をおこなっておりますが、約 30 のメールアドレスが宛先不明で戻ってきております。ここ数カ月、事務局からメールが来ていないとお思いの先生がいらっしゃいましたら、ぜひ事務局までお問合せください。

編集後記

広報委員会
夏　恒治

ニュースレター第６号を発行させていただくにあたり、玉井和哉理事長をはじめ、各委員会の先生方にはご多忙にもかかわらず快くご寄稿いただきましたことを深謝いたします。誠にありがとうございました。

また今回は新しく代議員に就任された 10 名の先生にご挨拶を賜りました。みなさまの今後のご活躍を祈念いたします。

さて、玉井和哉理事長のお言葉にもありますように、本学会は国際化を目指しています。この流れは、森澤佳三第41回学術集会会長からはじまり、井樋栄二第42回学術集会会長へと継承されてきました。「我々自身が世界の一部になること」とはこれすなわち日本と世界の垣根すら無くしてしまうことだと思います。図らずも今年は私が師事する望月由理事が学会長として第 43 回学術集会を広島で開催させていただきます。国際化に向けての国と国の垣根を超えたコラボレーションと同様に、職種を超えたコラボレーションができるように組織委員会でアイデアを出し合い検討しています。

私は、昨年度より広報委員会に参加させていただいております。この度、ニュースレターの編集に携わらせていただき、さらに編集後記を書かせていただく機会をくださり、大変光栄に思っております。広報委員としての活動を通じて日本肩関節学会の発展に寄与していけるよう努力するとともに、一肩関節外科医としても研究マインドを忘れず学会活動にも精力を注ぎたいと思いますので、ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。

最後になりますが編集にあたってお力添えをいただきました広報委員会の委員の先生方に感謝の意を述べさせていただきたいと思います。今後とも何卒よろしくお願い申し上げます。

一般社団法人
日本肩関節学会
Japan Shoulder Society

編　集：　一般社団法人 日本肩関節学会　広報委員会
望月由（担当理事）、池上博泰（委員長）、新井隆三、石田康行、北村歳男、中川泰彰、夏恒治、松村昇、山本敦史

発　行：　一般社団法人 日本肩関節学会
〒 108-0073　東京都港区三田 3-13-12　三田 MT ビル 8 階　株式会社アイ・エス・エス内
TEL 03-6369-9981 / FAX 03-6369-9982
E-mail office@ shoulder-s.jp　URL http://www.j-shoulder-s.jp/